

制作者

河口梨奈 Rina Koguchi

1978年生まれ。多摩美術大学芸術学科映像コース中退後、職も場所も転々。偶然の出会いから写真の世界へ。2020年美学校岡山校銀塩写真コース修了。現講師。主なグループ展に「KI」(2019/キブプロジェクト)、「超たまたま」(2023/大木裕之企画)、個展に「影の息」(2023/岡山市 studio apartment)。

藤本哲明 Tetsuaki Fujimoto

1982年生まれ。2008年初夏、詩作を始める。以後、断続的に詩作や詩に関する批評を行う。「甘美なバナナ」、「kaderOd」、「過剰」同人。詩集に『ディオニソスの居場所』(2017年、思潮社・第7回エルスール財団新人賞受賞)、『attoiumani_nizi』(2023年、思潮社)。共同詩集に『過剰』(2016年、七月堂)。

村津蘭 Ran Muratsu

1983年生まれ。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教。アフリカと宗教をテーマに文化人類学・映像人類学的地平から執筆・制作に関わる。著書に『ギニア湾の悪魔—キリスト教系新宗教をめぐる情動と憑依の民族誌』(世界思想社、2023年国際宗教研究所賞受賞など)、映像作品として「トホス」(2018年東京ドキュメンタリー映画祭短編部門奨励賞受賞)など。

この展示は、写真家の河口梨奈、詩人の藤本哲明、文化人類学・映像人類学者の村津蘭の三人で作ったものである。目の前にあるものにひたすら目を凝らし、世界の饒舌さを写真で切り取ろうとする河口と、詩が内包する抒情の在り処にノーガードで身を開こうとする藤本、西アフリカの霊的存在が照射する可能性について思考する村津。

表現媒体も志向もバラバラな三人が、いかにして一つの展示を作り得るのか。噛み合わなさをほぐしていく、時には武骨なままぶつけ合う、それによってお互いの手つきが少し変化する、その過程がすでに展示をつくる目的でもあった。

二〇二四年三月、Zoomの画面を介して、ベナンにいた村津の記録した「霊の視点からの映像」を、河口と藤本は見ると。ウェアラブルカメラで撮影された村の風景。

「少し不穏な感じ、歩く道は手前が暗く、空に抜けているけど、抜けすぎていない感じがあるね」

二〇二四年五月、河口による明石での撮影。藤本、村津は多少手伝いながら、ぼんやり眺める。いつもより、手前の影の気配を意識しながら、奥にある光を撮る。上から撮るのではなく、多少抜いて光に寄せる。

二〇二四年五月、藤本がこの時の会話と写真をもとにして、新たな詩「手前が暗い」を書く。(どうしたって手前が暗い、そういった類の写真ばかり手元に大切に残ってあって)

だから、出発しよう、

というのも僕ら、出発してよい、であるから！

トークゲスト

キタムアラタ Arata Kitamura

1971年生まれ。演出家、パフォーマンスアーティスト。1995年にアンネフォール創設。2000年、文化庁在外芸術家派遣員としてプラハ国民劇場(〜2002)。近作は、2023年「Fish Eat」(プラハ)、2024年「CHICO Project」(東京)、「WIG」(東京)など。

菊井崇史 Takashi Kikui

1983年、大阪生まれ。2012年、詩集『遙かなる光郷へノ黙示』(私家版)を制作。2018年、書肆子午線より同書の復刊とともに詩集『ゆきはての月日をわかつ伝書臨』を刊行。

松井至 Itaru Matsui

1984年生まれ。人と世界と映像の関係を模索している。2022年『私だけ聴こえる』を全国公開。

西村知巳 Tomomi Nishimura

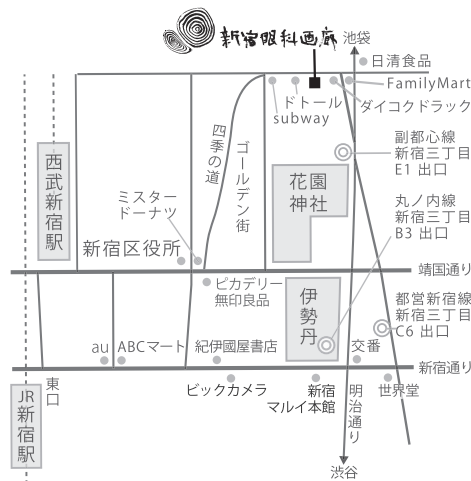
1978年山口県生まれ。写真に文章を付ける作風で作家活動を続けている。2013年以降は、高知と東京にそれぞれ拠点を置いている。2024年11月の時点で最後の個展「去来」2022年 路地と人(東京)。

新宿眼科画廊

〒160-0022
東京都新宿区新宿5-18-11

〈交通案内〉
JR新宿駅東口より徒歩12分
地下鉄東新宿駅より徒歩6分
地下鉄新宿三丁目駅より徒歩7分

TEL. 03-5285-8822
MAIL. info@gankagarou.com
WEB. www.gankagarou.com/
X. @gankagarou



何度も会い、手を動かし、書き、語る。こうしたことを繰り返しながら、わたしたちは展示を少しずつ形づくっていった。その作業にいつも纏わりついているのが、影の存在だった。

「ベナンで話されるフォン語では、影と霊という言葉は同じなんだ」

と村津が言う。岡山の郊外の河原で、河口が撮影するのを、またぼんやり見ている時だった。霊が立ちあがる、その契機について村津は話し続ける。カメラに映っているのは、繁茂する植物の影にのびるつる植物の、獐犢なまでの絡まり合いの、影と気配。

都市化で街に光が溢れ、影が追いやられていったのなんて、ずっと前のことなのに、それでも足りないかのように、生活に光は浸食しつづける。デジタルサイネージが、あるいはデジタルカメラ、スマートフォンの画面の明るすぎる光が、街にも、個人のスペースにも広がり、その流れは不可逆的なようにも思える。

いつの間に、影のない光がこんなに氾濫したのだろうか。

わたしたちはまるで騙されたような気持ちで、追いやられた影に目を凝らす。そうすると、影は影の分際で、けれども確かな存在感で、沈黙を、貫いている。